

不安と恐怖と混乱の中での救護活動

第1救護班 看護師 手術室 渡邊 あゆみ

～～～ でもいつもと変わらず頑張っている仲間がいる ～～～

救護班として相馬市の避難所にて救護活動を開始してまもなく、原発事故の影響で撤退することになった。避難者の非難する声が聞こえる中、罪悪感と恐怖感が入り混じった中で川俣町に移動し、原発からの避難者の多くいる避難所で救護活動を行った。寒くつらい夜だった。避難所では、「被ばく」という声が飛びかい、その都度小さなパニックが起き、恐怖を感じた。一方で、避難所では多くの感謝と励ましの言葉もかけられ、逆に感謝した。

帰還後、病院の手術室でいつもと変わらず頑張っている仲間から暖かく迎えられ、心強かった。

地震発生から間もなく、救護班第1班として救護活動を行うよう指示された。院内は未曾有の大災害という緊急事態、そして大きな余震が何度も続く緊迫した状況の中で、慌ただしい時間を過ごし、翌3月12日朝、南相馬方面へ向かうことになった。この時は、まさか原発が危機的状況にあるなど認識していなかったし、想像を絶するような大きな津波が襲っていたとは夢にも思わなかった。余震、停電、断水、家は？家族は？後ろ髪をひかれるような気持ちでの出発だった。

途中、家や車や船が流され、悲惨な状況になっている現場を通過し、地震と津波の被害の大きさを目の当たりにした。この辺りの住人は無事なの？と、言葉が出なかった。

相馬市の体育館で最初の活動を行った。津波から逃れた南相馬市の被災者がたくさん避難していた。まだ濡れた服を着ている人、靴がなく裸足の人もいた。しかし、救護活動もままならないうちに、原発が爆発し、すぐ撤収することになった。「どうせ見捨てていくんでしょ」そんな罵声のような避難者の声が撤収の際に聞こえてきた。罪悪感と、危険な場所から早く逃げたいという恐怖感が入り混じり、心が折れそうだった。

その後、土砂崩れで通れない道に何度も遭遇しながら、ようやく川俣町に到着した。川俣町内の小中学校に、原発からの避難者が多数いるとのことで、川俣済生会病院を拠点とし、救護活動を行うことになった。夜23時すぎ、私は滋賀日赤の救護班と共に、川俣小学校体育館へ向かった。避難者の数は2000人を超えていると、避難所の管理者から伝えられた。昇降口、廊下、教室、体育館、歩く隙間もないほどの避難者であふれ茫然とした。活動の突破口がわからなかった。数十人に薬を渡し、目があった人に声をけるのが精いっぱいだった。校庭も車で溢れ、その車内でたくさんの人が過ごしていた。懐中電灯を片手に各車をラウンドした。気温は-3度とものすごく寒く、つらかった。

翌3月13日、川俣済生会病院の応援を行った。川俣町内に避難してきた被災者がたくさん訪れた。私が受付をし問診した方だけでも200人を超えた。薬を持参していない人がほとんどだった。家が流された、家族が津波で流されたまま連絡がとれない、原発が爆発した瞬間たくさんのコンクリート片を浴びた…、悪夢のような話をたくさん聞き、涙が出た。ストレッチャーで運ばれる人がいると、「被曝者だ」「近づくと被曝するぞ」という声が飛び交い、その都度小さなパニックが起きた。得体の知れない恐怖と不安で、時間がものすごく長かった。活動を終え、放射線量を測定して帰宅した。

翌日、手術室に出勤すると、いつもと変わらず明るく頑張っているスタッフの姿があり、温かく私を迎えてくれた。心強かった。思えば、避難所で、数え切れないほど「私達のためにありがとう」「あなたも大変なのに頑張ってる」と言葉をかけてもらい、手を握られた。逆に感謝、そして貴重な経験、悪いことばかりではなかったな、と今思う。